政大日本研究【第十三號】
2016 年 1 月，頁 71～91

開化的光與影——芥川龍之介「雛」論

高啟豪*

中文摘要

短篇小說「雛」在芥川龍之介作品中被歸類為開化物的文本中，性質當屬特殊。與之前發表同系列積極評價文明開化光明面的作品「阿富的貞操」及「舞踏會」作風相異，本作品將敘事的重心放在開化所帶來的黑暗面，著眼點的不同使本作通篇寓有對近現代文明強烈的批判意味。

芥川藉由作中人物阿鶴回顧明治時代的敘事手法，描述構成本小說主線的雛人形轉賣事件，並佐以阿鶴眼中所見的明治維新開化所帶來的社會變革。轉賣給美國人的雛人形被指涉為「晚景淒涼」的玩具，其中隱含著對明治時期日本政府亟欲參加的列強資本主義世界當中大量生產・大量消費原理的懷疑與批判。

芥川藉由描寫明治維新期凋落的家族，痛陳日本文明開化的光與影。作為開化表徵的洋燈所帶來的光輝，以及隱藏在開化背後的暗部，一明一暗，不啻為現代國際化浪潮中傳統文化存廢危機的縮影，發人深省。

關鍵詞：芥川龍之介、明治維新、開化物、敘事、資本主義社會

* 北海道大學大學院博士後期課程

Light of Civilization: A study of Ryunosuke Akutagawa's "Hina"

KAO, Chi-Hao*

Abstracts

"Hina" written by Ryunosuke Akutagawa, is different from his earlier works known as "Kaikamono(a group of novels that refer to civilization of Meiji Period)", such as "Otomi's Virginity" or "Butoukai(Masquerade)" due to Akutagawa shows his criticism and sentimentalism about the Meiji Restoration in the text of "Hina".

From the narration of Otsuru, the old female protagonist, we can recognize how does the Meiji Restoration changes the life styles of Japanese people. The Hina dolls that are sold to Americans could be the metaphorical language of capitalism. Mass production and mass consumption of capitalist society that Japanese Government tried hard to join shows threats and pessimism to Japanese tradition.

By describing a Japanese family's fate in the Meiji Restoration, "Hina" shows the light and darkness of civilization, and the crisis of tradition in the wave of globalization.

Keywords: Ryunosuke Akutagawa, Meiji Restoration, Kaikamono(a group of novels that refer to civilization of Meiji Period written by Ryunosuke Akutagawa), Narratology, Capitalism

* Graduate School of Letters, Faculty of Letters, Hokkaido University

開化のあかり——芥川龍之介「雛」について

高　啓豪*

要旨

芥川龍之介の「雛」は、開化物と呼ばれる作品群の中でも、文明開化の光を礼賛するような作品「お富の貞操」や「舞踏会」などと異なり、その闇に目を向けて批判を込めた特異なスタンスを持つ作品に仕上げられている。

芥川はヒロインお鶴の語りから、話の主線である雛人形の売却と、維新開化がもたらした生活様式の変革に焦点を絞る。アメリカ人に売却される雛は「憂き目を見てゐる」ものと想定され、そこには明治日本が仲間入りを果たそうとする資本主義社会における大量生産・大量消費の摂理への悲観が込められている。

開化の象徴であるランプが齎した光と、その裏に表裏一体で存在する闇。芥川は「雛」から明治維新で凋落した一家を描き、開化の光の裏にある闇、そして現在まで続く文明的危機を我々に思い起こさせる。

キーワード：芥川龍之介、明治維新、開化物、語り、資本主義社会

* 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程

開化のあかり——芥川龍之介「雛」について

高　啓豪

1. はじめに

近代国家における政治の変革は、文化・経済産業などすべての分野に影響を及ぼす。歴史が動いた瞬間が生活様式の変化となって我々の毎日を変えてゆくことは、時には生活している主体自身さえも意識しない。振り返って初めて変革が訪れたことに気づくというものであった。明治維新の変革を目の当たりにした老女の懐古的な語りは、本稿で論じる芥川龍之介の「雛」の主な内容をなす。芥川は、雛人形の売却をめぐるヒロインお鶴一家の動きを取り上げ、老女になったお鶴の語りを借りて文明開化の諸相ーー必然的な矛盾と期待される調和を克明に点描する。維新で近代国家の体裁を整え、人々の生活を潤沢にしていく、というのが明治政府の目標の一つだが、すべての日本人が欧米の器物や制度などに順応できるわけにはいかない。本作では、「あかり」と「雛」という二つの器物を取り上げ、そこから切込みを入れて、最終的には日本の異文化受容の過程を老女の語りによって表象する。

明治期の文明開化は、言い換えれば西洋を手本にした政府主導のグローバリゼーションである。政府の強力な中央集権制により国民全体を開化＝西洋化する目標を掲げた。明治政府は西洋の目覚ましい発展を目にすると同時に中国の凋落ぶりに危機感を喚起し、西洋列強にあやかりたい一心から脱亜入欧の論調に主導される維新が始まった。その端緒として、明治二（一八六九）年に四民平等のスローガンを唱え、日本中の不平を無くそうとする。だが、維新を推し進めていくうちに、また中心と周縁、大都会と地方の格差、身分の獲得や喪失といった新しい課題が生成する。

維新は、元来日本にあった限りある資源・権能の再分配につなが

る革命である。その革命の波に乗り出世する人もいれば、新しい機運に順応できずにその波に飲み込まれてしまう人もいる。維新によって齎された恩恵の光を浴びた勝ち組と、既有の利権が消失し闇に放り込まれる負け組に別れるのは、質量保存の法則に似ている。明治維新という日本社会全体の大きな動きの中で全員が幸せになるとは限らないのである。芥川龍之介は、「開化物」と呼ばれる作品群の中で西洋文明の導入でもたらす生活様式の変化を概ね肯定的に捉えてきたが、今度は開化で敗北した人物に視線を注ぐ。

芥川龍之介の「雛」は、大正十二年（一九二三）三月一日発行の『中央公論』に掲載され、のち『黄雀風』（新潮社、大正十三年七月）に収められた。なお、「雛」の原型と思われる作品として、未公開作品「明治」（推定大正五年）がある。周知のごとく一九二三年と言えば、大正時代に大きな変革をもたらした関東大震災（九月一日正午）の発生した年であったが、本作はその半年前の作品である。老女の語りを借りて明治期に凋落した一族の有り様を描く家庭劇であり、開化物の中で最後に発表されたものである。その描写から随所に失われた古き良き時代への情念がにじみ出て、今までの開化物とは違った懐古的ノスタルジックな性格を有している。

先進気鋭の開化人として描かれたお鶴の兄英吉と、自ら「旧弊人」と自嘲するお鶴の母との間に生まれた新旧の二項対立は、老女お鶴の語りから容易に連想される。従来の研究は新旧対立の構図をなぞって論じるものが多かったが、結局兄の開化志向も癲狂院に送り込まれることで失敗に終わってしまい、テクスト全体は滅びの美・哀れな美感覚といった感傷的なムードに包まれる。本論は、まず母・お鶴と英吉を従来の敵対的な対立構図を払拭すべきものとして捉え、開化新旧の対比で、母・お鶴と英吉両者のスタンスを家族の再興という同一の目標点に向かって進む関係として、作中人物の位相を捉え直すことを試みたい。

「雛」はお鶴という老女の回想話によって構成された短編小説で、梗概は以下のようなものである。紀の国屋という江戸時代の豪商の

末裔お鶴一家は、徳川幕府の瓦解以来、明治社会の変化について行けず、加えて家は三回も火事に遭い、コウモリ傘屋の経営も手違いになる。お鶴の十五歳の年の暮れ、大歳の凌ぎさえできなくなる経済難の中、彼女の父は、総桐の箱に入れられた雛人形を丸佐という骨董屋の仲介で横浜のあるアメリカ人へ売り渡すことを決意する。当時十八歳のお鶴の兄・英吉は開化人気取りで、癇の強い人である。雛人形売却の手付金をもらったその夜、英吉は英語の読本を読みながら、雛への未練で涙をためて悲しんでいる母を見て「けげんさうに」妙な笑い方をすると、お鶴の怒りを買い、兄妹喧嘩になる。やがて母は面疔を患い伏せてしまうが、その間兄英吉は藪医者として馬鹿にしていた漢方医を頼りに、毎日煎薬を母に飲ませたり、蛭に血を吸わせたりして、お鶴もお稲荷様へ神頼みして、母の快癒を期待する。その間、お鶴は何回か雛をもう一度見たいと父にせがむが、手付金を貰った以上、人様のものだと父に拒まれ続ける。十一月の末、雛を買い手に渡す前の日に、人力車に乗ったお鶴は西洋人を乗せた馬車と衝突しかかる。帰りに新しく買ったランプを取りに出かけた英吉と出会う。お鶴は英吉に「雛を見たいと言うな」と命じられ、ランプを持ったまま帰宅する。その晩、まぶしすぎるぐらい明るいランプが灯り始めるが、母は石油の匂いで食欲がなくなる。夜になると、ふと目覚めたお鶴は、薄暗い行灯をともした土蔵で雛を並べ立てる「女々しい、……その癖おごそかな」父を見たと言って、老女お鶴の語りが完了する。そして最後に、書き手による着想から書き上げるまでのエピソードが付け加えられる。

老女お鶴の語りから認められるのは、新しい時代と戦う葛藤の中、内省の余裕すらなく、無残に滅び行く運命を辿った明治開化期に淘汰された物事と人間の姿である。書き手芥川龍之介は、「古雛の首を玩具にしてゐる紅毛の童女」の表象に委ねて、文明批判をテクストに持ち込む形で作品が終わる。

本論に入る前に、まず芥川の文芸活動における「雛」の発表時期について検討してみよう。

> 「雛」は極度に人工的な構成と言辞を駆使して実生活との有機的な絆を断ち切った場で、虚構の時間の世界を築き上げるという、作者のそれ迄の生を動かしてきた唯一と云っていい情熱をやや喪失し、やがては身辺に取材する〈保吉物〉に移行しようとする時期にものされた作品と言ってよい。[1]

石割透は「雛」の発表時期に着目し、芥川龍之介が保吉物に移行する前に発表した本作品が内在する過渡性を指摘する。「雛」が発表された一九二三年は、芥川文芸活動の時間軸において、彼が意識的に構築したリアリズム文学から、身辺小説や「筋のない小説」が代表する無意識的アバンギャルドな作品へ興味を示し、やがて転向する時期だと捉えられる。本作は開化物でありながら保吉物を中心とした短篇集『黄雀風』に収められたことで、発表時期の特異性が認められる。すなわち、本作は芥川の創作活動の中期から晩期にかけて作風の変換期に書かれた作品として認識して良いと思われる。

2. 語りの屈折

「雛」は、テクストの前後でわかるように、「或老女の話」で敷衍する口承文芸の形をとった小説である。その老女の語りは特徴的で、後に太宰治の「哀蚊」（昭和四年五月、小菅銀吉の名で『弘高新聞』に発表）、「葉」（昭和九年四月、季刊同人雑誌『鷭』初出、昭和十一年処女作品群『晩年』所収）に影響を与えた。読者は、作者・書き手芥川龍之介と、語り手お鶴の合作を通じて明治開化期を覗くという複雑な視点を得るようになる。老女お鶴の語りを頼りに、我々は「雛」にまつわる情報を知るようになる。老女がいつこの話を披露したかは、作中では全く提示されていない。時間に関する情報は、ただこの話はお鶴が「十五歳の年の暮れ」での出来事という言及のみである。作品の時間は、すべて老女の個人的な内なる体験に準じ

[1] 石割透「「雛」（芥川龍之介）について」（『日本文学』、一九七五年十二月）、二二頁

て語られ、時間を特定する手がかりなどがなく、テクストと真実の間を自由に往来する可逆性が最初から許されていない。「雛」の原型が未公開作品「明治」（大正五年頃）であることのみが、老女の語っている時代が明治時代だということを推定するのであって、テクストの中には「明治」という言葉さえ見当たらないのである。我々は「雛」の語りの水準として、明治の開化というテーマを扱いながら、実在する時間のリアリティを隠し切ろうとする「老女の語り」から人工的に構築したテクストであるという認識を、まず念頭に置かなければならない。

> それさへ売らうと申すのでございますから、わたしの父、十二代目の紀の国屋伊兵衛はどの位手もとが苦しかつたか、大抵御推量にもなれるでございませう。何しろ徳川家の御瓦解以来、御用金を下げて下すつたのは加州様ばかりでございます。それも三千両の御用金の中、百両しか下げては下さいません。因州様などになりますと、四百両ばかりの御用金のかたに赤間が石の硯を一つ下すつただけでございました[2]。

以上は、テクストの初頭でお鶴が自らの身の上を語る記述である。丁寧な言葉使いから、彼女が由緒ある家柄の出であることを推測できよう。「徳川家の御瓦解」の話は、当時十五歳のお鶴の語りのレベルには到底思えないので、それは老女になったお鶴の理解で開示した情報だと思われる。作者（書き手）と十五歳のお鶴、そして老女になったお鶴（語り手）という複数の情報源が存在し、当時知らないはずの事柄を網羅しようとする語りのスタンスが徐々に明らかになっていく。天真爛漫に造形された少女時代のお鶴には、家庭内の詳しい事情を知る由もなく、経済難で雛の売却を余儀なくされることも、母ほど深刻に思わないようであるが、老女お鶴の語り口から、その悲壮感をわざと誇張して語ろうとしているのである。鈴木淳は、

[2] 芥川龍之介「雛」本文（『芥川龍之介全集　第十巻』、岩波書店、一九九六年八月）三～四頁

「お鶴の語りは老女の視点から情報を補完する一方、幼い少女の立場を強調し、その視点に寄り添うことによって聴き手に与える情報を一方的に制限するのである[3]」と指摘した。この作為的な語りに内包されるのは、同一人物である少女と老女の視点。両者が歩み寄ろうとする語りが併せ持つ重層性が、テクストを読み取る際に看過できない現象になる。

また、作中至る所で見当たるように、「雛」の売却に纏わるエピソードを、書き手芥川龍之介は数多く用意した。「この丸佐の禿げ頭位、可笑しかつたものはございません。と申すのは頭のまん中に丁度按摩膏を貼つた位、入れ墨がしてあるのでございます[4]」や、「徳蔵もやはり御一新以後、苗字をつけることになりましたが（中略）何でも徳蔵の申しますには、今にも斬罪にされ兼ねない権幕だつたさうでございます[5]」など、如何にも物語の進行に関係のないエピソードを執拗に挿入しようとする。老女お鶴の語りから見当たる饒舌で冗漫な語りにより情報を付け加えることで、芥川が作中人物であるお鶴の性格を浮き彫りにする語りの作為的なストラテジーが窺える。これらの情報から、お鶴は非常に口数の多い老女であることは容易に思いつく。宮坂覚は、ゴシップ的な老女の語りについて、以下の見解を示した。

> 最初の「頭の入れ墨の逸話」による〈語り〉の蛇行と関わっていると考える。あえて、直線的な〈語り〉に終始せず、冒頭で〈語り〉に、蛇行を入れたテクストの意図は、あるいは蛇行せざるを得なかった〈老女〉お鶴の語りの逡巡に心理の変動に焦点が合えば、語られなかった〈余白〉は、英吉と母に纏わる家庭劇を予感させるのである[6]。

---

[3] 鈴木淳「芥川龍之介『雛』論―創出される〈刹那の感動〉」（『明治大学大学院文学研究論集』、二〇〇三年九月）、八五頁
[4] 同注二、四頁
[5] 同注二、一六頁
[6] 宮坂覚「『雛』―重層的〈語り〉の構造から醸し出される〈語られていないこと〉」（『解釈と鑑賞』、一九九九年十一月）、一〇六頁

老女の語りが饒舌であればあるほど、そこに立ち現れるべき兄と母にまつわる肝心な話が極小にまで圧縮されて、ついに語り得なかったのである。本文で「お前はわたしが憎いのだらう？　さもなけりやあわたしが病気だと云ふのに、お雛様を……お雛様を売りたがつたり、罪もないお鶴をいぢめたり、……そんなことをする筈はないぢやあないか？　さうだらう？　それならなぜ憎いのだか、……[7]」と怒る母に対して、兄は「その後父母の死んだ時にも、涙一つ落さなかつた兄、――永年政治に奔走してから、癲狂院へ送られる迄、一度も弱みを見せなかつた兄、――さう云ふ兄がこの時だけは啜り泣きを始めたのでございます[8]」という反応を見せた。こう綴るお鶴の語りに見られるように、おそらくお鶴が終始兄に対して示す無理解から由来するであろうか、兄の涙についてのエピソードが短絡的で、前の饒舌的な「維新人物像」より説明が圧倒的に不足である。後の兄が「癲狂院へ送られる」と情報を開示したのも、老女のお鶴が意図的に兄を悪人に見立てようとして行った情報操作としか考えられない。お鶴が語り得なかった兄の涙の訳について、仁平道明は以下のように分析した。

> 家のおかれた状況を十分にはわかっていない妻や娘をまもり、かたむいた家をなんとかたてなおそうとする父のそばにあって、妹の雛を売らなければならない状況に追い込まれている家の事情が痛いほどわかっていた《長男》としての思い、兄としてのかなしみが、そこにはある[9]。

お鶴には理解できない兄の涙の訳、そして兄と母との間の語り得なかった部分は、経済難を理解した兄の深刻な悲しみとして捉えられる。一家の長男として責任感をつよく感じる兄は、没落した家の情状を目の当たりにして、自分なりに家を立て直そうと行動していたことは、容易に想像される。すなわち、維新の新しい知識を身に

[7] 同注二、一五～一六頁
[8] 同注二、一五頁
[9] 仁平道明「「雛」試論―「意地の悪い兄」のためのレクイエム」(『文学・語学』一九九三年三月)、五八頁

つけようと躍起になり、英語の読本を手にしては政治学に没頭する兄の熱意に、家を再興させるという訳があったのである。従来、維新開化の申し子で妹に「意地悪」した兄の行動論理は、仁平道明の「かなしき《孝子》[10]」論に根ざしていたのである。

また、老女お鶴の蛇行した語りに出てくる禿頭の刺青、徳蔵の苗字などの支線エピソードについては、あながち無意味な語りとは言い切れない。「御一新―四民平等のインチキ性を暴いている[11]」と鈴木敏子がこの語りから維新の虚偽性に着目するように、明治政府が目指す理想と現実の差はたしかに存在する。この語りで維新開化の世相がより具体的に表象されるが、不必要な情報を与えすぎた印象も否めない。無造作のように語るように見せかけるものの、最終的に指向するものは、ほかでもない、失われつつあるものへの老女お鶴自身の感傷でしかないのである。

要約すれば、老女お鶴の語りには以下の特徴が見られる。

① 異常に饒舌、聞き手の信頼を得ようとして細部まで再現した丁寧すぎる語り。

② 細かい部分は後に獲得した知識で補完し、都合よく再話する。

③ その結果、立場が中立性に欠け、所々開化批判のメッセージが込められている。

一人称視点でありがちな語り手の信憑性問題は、「雛」を読解するうえで主な課題となるが、この偏向性もまた作品全体を芥川が志向するノスタルジックで感傷な方向へと強く牽引していくのである。

3. 開化と旧弊のコントラスト

先にも論じたように、芥川は本作において老女の語りを拵えることによって開化が齎した生活の変化を対照的に書いた。明治開化期という大きな歴史の脈動が、やがてひとりの日本国民であるお鶴の

[10] 同注九

[11] 鈴木敏子「「枯野抄」・「雛」の読み方」(『日本文学』一九七六年四月)、八一頁

家庭内の時間にも動かし始める。本作はヒロインお鶴一家に変革が訪れる時期を雛人形の売却に照準を合わせている理由は、作中の時間という要素を検討すれば明らかになると考えられる。「雛を手放しさへすれば、この大歳の凌ぎだけはつけられる[12]」「十一月の中旬にはとうとう横浜の亜米利加人へ売り渡すことになつてしまひました[13]」「十一月の二十九日、――愈雛と別れると申す一日前のことでございます[14]」と、テクストのお鶴の語りの記述から見ると、日付まで克明に細かく記されていることで、彼女にとって一大事であったことは想像に難くない。十一月中旬、年越しの資金を工面するため雛の売却が決まる。その売却で得られる金額は「確か三十円とか申して居りました。それでも当時の諸式にすると、ずゐぶん高価には違ひございません[15]」という記述が見られるように、「莫迦莫迦しい」ほど高価な取引である。明治初期の物価を検討すると、コメ一石（一五〇キロ）は三十銭から五十銭前後の相場があったため、三十円の雛は随分高価なものと言わなければならない。年越しの資金の工面で犠牲になる「雛」の引き換えに、お鶴の父が購入するのは何であろう。

「ぢやあもう無尽燈はお廃止ですか？」

「あれももうお暇の出し時だらう。」

「古いものはどしどし止めることです。第一お母さんもランプになりやあ、ちつとは気も晴れるでせうから。」

父はそれぎり元のやうに、又算盤を弾き出しました。[16]

以上の父と兄の会話で示した通り、雛人形を売却し、その得た金銭でランプを買うことになる。雛の持ち主お鶴に買ってあげる約束していた帯の話は作中に無く、その代わり、ランプを買うくだりが実に仔細に語られる。つまり、開化と旧弊の新旧交代の対象として、

[12] 同注二、五頁
[13] 同注十二
[14] 同注二、一一頁
[15] 同注二、九頁
[16] 同注二、一二頁

ランプに焦点が合わせられるのである。

雛とランプは、一見関連性の希薄な器物であるが、前に引用した取引関係でつながりを持つようになる。また次の引用で兄の英吉は、雛なぞ日常には不要なものだとけなしていることで、雛人形の非日常性＝祝祭性とランプの日常性のコントラストを示唆する重要なメッセージが込められ、祝祭性と日常性の対比が注目に値すると思われる。

また、ランプは、古い無尽灯を代替する「開化のあかり」という意味が付与されていることを看過してはならない。明治維新は、単なる歴史上の一事件として扱われるのではなく、先述したとおり日本全体を近代化する動きであって、大衆の生活様式に変化をもたらした大きな事件である。芥川は、こうした明治に生きた人間の生活の様変わりを、「無尽灯」「ランプ」といった生活道具の新陳代謝によって、文明開化をより一層具体化・可視化したのである。

お鶴の目に映る当時十八歳の兄の英吉の造形も、実に興味深いものである。「癇の強い兄でございます。兄は開化人とでも申しませうか、英語の読本を離したことのない政治好きの青年でございました。これが雛の話になると、雛祭などは旧弊だとか、あんな実用にならない物は取つて置いても仕方がないとか、いろいろけなすのでございます。その為に兄は昔風の母とも何度口論をしたかわかりません[17]」と語っているように、兄の英吉は開化人気取りのわがままな青年である。母が自ら「旧弊人」と自嘲するのに対し、兄はその対極的な位置に置かれている。

> その晩のことでございます。わたしたち四人は土蔵の中に、夕飯の膳を囲みました。尤も母は枕の上に顔を挙げただけでございますから、囲んだものの数にははひりません。しかしその晩の夕飯は何時もより花やかな気がしました。それは申す迄もございません。あの薄暗い無尽燈の代りに、

[17] 同注二、四～五頁

今夜は新しいランプの光が輝いてゐるからでございます。
兄やわたしは食事のあひ間も、時々ランプを眺めました。
石油を透かした硝子の壺、動かない焔を守つた火屋、――
さう云ふものの美しさに満ちた珍しいランプを眺めました。
「明るいな。昼のやうだな。」
　父も母をかへり見ながら、満足さうに申しました。
「眩し過ぎる位ですね。」
　かう申した母の顔には、殆ど不安に近い色が浮んでゐたものでございます。
「そりやあ無尽燈に慣れてゐたから……だが一度ランプをつけちやあ、もう無尽燈はつけられない。」
「何でも始は眩し過ぎるんですよ。ランプでも、西洋の学問でも、……」
　兄は誰よりもはしやいで居りました。
「それでも慣れりやあ同じことですよ。今にきつとこのランプも暗いと云ふ時が来るんです。」
「大きにそんなものかも知れない。……お鶴。お前、お母さんのおも湯はどうしたんだ？」
「お母さんは今夜は沢山なんですつて。」
　わたしは母の云つた通り、何の気もなしに返事をしました。
「困つたな。ちつとも食気がないのかい？」
　母は父に尋ねられると、仕方がなささうに溜息をしました。
「ええ、何だかこの石油の匂が、……旧弊人の証拠ですね。」
　それぎりわたしたちは言葉少なに、箸ばかり動かし続けました。しかし母は思ひ出したやうに、時々ランプの明るいことを褒めてゐたやうでございます。あの腫れ上つた唇

の上にも微笑らしいものさへ浮べながら[18]。

開化物における新旧二項対立の図式として、母対兄、旧弊と開化の両極端にいる人物が設けられた。その間に挟まれたのは、お鶴と父。旧と新といった鮮明なコントラストで家庭劇が仕立てられる。他に少女お鶴が出かける際に人力車が「西洋の婦人を乗せた馬車とまともに衝突しかかりました。」という記述もあるように、この人力車と馬車と衝突しかかったシーンを用意することで、二項対立の構図を前面に出そうとする。人力車のエピソードが特にわざとらしい。わかりきったことを白々しく、示現的に書くことは、あくまでも安易な文明批判にしか過ぎない。老女の語りをそのまま反映した結果なのか。それとも何らかの企みがあるのではないか。

> 彼（論者注：英吉）も結局はその〈西洋〉に眩惑されて、近代的自我の確立どころか、人生そのものさえ見失って発狂して、精神病院に一生を終わるに至ったと考えられるのであり、彼こそ、後進国日本の拙速的な近代化が生み出した犠牲者の一人に他ならないであろう。（中略）加速度な近代化即西欧化をすすめる中で、結局は、土着性や伝統性から乖離してしまい、空疎な空想性のみを鮮明にし、遂に日本の現実に受容されることのなかったロマンチシズムの姿を描くことにあったと思われる[19]。

海老井英次の論点から分かるように、そこに立ち現れるのは維新の新旧対立の図式でアイデンティティを失う人々の哀れな姿である。人力車対馬車、無尽燈対ランプといったマテリアルが代弁する新旧の優勝劣敗の摂理が明らかである。結局古いものが概ね新しいものに敗北し、淘汰されていく運命をたどる。

---

[18] 同注二、二〇～二一頁

[19] 海老井英次「現代文教材研究講座２１『雛』－玩具箱の中の〈幻〉　芥川龍之介の作品を読む５」（『月刊国語教育』、一九八三年五月）、一二二頁

4. 懐古情念の敗北

雛がいよいよ売却される前夜の出来事が、この短編小説のクライマックスである。それは、「売ってしまえば他人のもの」と頑なにお鶴の「もう一度雛を見たい」という願いを拒否する父が、夜中こっそりと起きて「お節句以来見なかつた雛」を並べ立てる場面である。

> それからどの位たちましたか、ふと眠りがさめて見ますと、薄暗い行燈をともした土蔵に誰か人の起きてゐるらしい物音が聞えるのでございます。鼠かしら、泥坊かしら、又はもう夜明けになつたのかしら？――わたしはどちらかと迷ひながら、怯づ怯づ細眼を明いて見ました。するとわたしの枕もとには、寝間着の儘の父が一人、こちらへ横顔を向けながら、坐つてゐるのでございます。父が！……しかしわたしを驚かせたのは父ばかりではございません。父の前にはわたしの雛が、――お節句以来見なかつた雛が並べ立ててあるのでございます。
>
> 夢かと思ふと申すのはああ云ふ時でございませう。わたしは殆ど息もつかずに、この不思議を見守りました。覚束ない行燈の光の中に、象牙の笏をかまへた男雛を、冠の瓔珞を垂れた女雛を、右近の橘を、左近の桜を、柄の長い日傘を担いだ仕丁を、眼八分に高坏を捧げた官女を、小さい蒔絵の鏡台や箪笥を、貝殻尽しの雛屏風を、膳椀を、画雪洞を、色糸の手鞠を、さうして又父の横顔を、……
>
> 夢かと思ふと申すのは、……ああ、それはもう前に申し上げました。が、ほんたうにあの晩の雛は夢だつたのでございませうか？　一図に雛を見たがつた余り、知らず識らず造り出した幻ではなかつたのでございませうか？　わたしは未にどうかすると、わたし自身にもほんたうかどうか、返答に困るのでございます。
>
> しかしわたしはあの夜更けに、独り雛を眺めてゐる、年とつた父を見かけました。これだけは確かでございます。

さうすればたとひ夢にしても、別段悔やしいとは思ひません。兎に角わたしは眼のあたりに、わたしと少しも変らない父を見たのでございますから、女々しい、……その癖おごそかな父を見たのでございますから[20]。

この描写の中でもっとも注目すべきなのは、父が使用した照明道具にある。開化のあかりである石油ランプではなく、旧弊を代表する薄暗い行燈である。行燈と雛、お鶴の家にあるこの二つの道具は一見無関係に見えるが、実は開化がこの家にもたらした変化を表す二つの軸をなしている。古い無尽灯は石油ランプに淘汰され、日常生活では不要になった雛はアメリカ人に売却される。父が夜中こっそりと起きて「旧弊」の象徴である行燈を灯しながら雛を見つめる場面において、この二つの道具が並行している軸が見事に合流し、交じり合う時点では神秘的な美感覚をほぼ必然的に喚起する。開化の光＝西洋文明のランプに照らされた日本に、老女お鶴の語りを借りて伝統回帰の大切さを唱える芥川は、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」（昭和八年）と似通うものがある。上に引用したテクストでは、タイトルとなる「雛」の描写がはじめて仔細に描かれる。もはや宗教的な崇拝の対象として恭しく雛を並べ立てる父のイメージを加え、ほとんど神々しいと言っても過言ではないほど、雛の持つ芸術品的なアウラが遺憾なく表象されたのである。

かつて栄えた一家が落ちぶれたことを、父は恐らく一番痛感しているであろう。古風で堅き人間だが、別れを惜しんで一人で雛をこっそりと取り出して眺める父は、その姿は「女々しい、……その癖おごそかな父」であった。失われつつある古き良き時代への思いをすべて雛に託した。そして老女になったお鶴もその場で「わたしと少しも変わらない父」を見出し、その感動と感傷を共有できたのである。にもかかわらず書き手芥川龍之介は、作品成立の逸話を披露することで、短編小説「雛」にどんでん返しの結末が付け加えられ

[20] 同注二、二二～二三頁

ることになった。

「雛」の話を書きかけたのは何年か前のことである。それを今書き上げたのは滝田氏の勧めによるのみではない。同時に又四五日前、横濱の或英吉利人の客間に、古雛の首を玩具にしてゐる紅毛の童女に遇つたからである。今はこの話に出て来る雛も、鉛の兵隊やゴムの人形と一つ玩具箱に投げこまれながら、同じ憂きめを見てゐるのかも知れない[21]。

単なる一家の没落を物語るテクストだが、末尾に外国人の少女を登場させるにあたり、急激に文化批判の色を帯びるようになる。玉石混淆状態の玩具箱は、あたかもお鶴一家を冷笑しているようである。現実に引きずり出される結末、懐古の情念が完全に裏切られ、踏み潰される残酷な瞬間が付記での書き手の言葉によって表象された。首のみ無残な形で壊された雛が、父と娘がこっそりと一緒に体験した感動をショックに変えてしまっている。これまでの文脈にない強烈なコントラストを感じずにはいられない。盛り上がった懐古的情緒を宙吊りにしたまま物語を突然終わらせようとしているのである。三十円もする高価で思い入れのある人形は、単なる廃物同然の玩具と同一視されてしまう残酷さが読者に多大な衝撃を与えずにはいられない。藤井貴志は芥川の眼差しを「「薄暗い行燈」に照らされた雛の陰翳美をアイロニカルに相対化し、何よりも〈廃物〉、歴史のガラクタと成り果てた「古雛の首」にこそ哀惜的に注がれるのだ[22]」と捉えている。

また、大量生産・大量消費時代到来の象徴として、箱に入れられた色とりどりの玩具が描かれている。そしてその持ち主として、雛に対する思い入れの無い、無神経な「紅毛の童女」である。ベンヤミンは「複製技術時代の芸術作品」（一九三六）において、以下の論述を展開した。

---

21 同注二、二三頁

22 藤井貴志「〈廃物〉への眼差し－芥川龍之介「雛」と林京子「雛人形」－」（『芥川龍之介研究』、二〇一二年九月）、二四頁

オリジナルのもつ〈いまーここ〉的性質が、オリジナルの真正さという概念を形づくる。そしてまた他方では、この対象を今日まで同一のものとして伝えてきたひとつの伝統、という考え方は、真正さを基盤として成り立っている。真正さの全領域は、技術的――そしてもちろん技術的なものだけでない――複製の可能性を受け付けない。

（中略）

〈真正〉な芸術作品の比類のない価値は、つねに儀式に基づいている。このような基づき方は、いかに間接的なものになっていようと、美への礼拝の最も世俗的な諸形式においても、世俗化された儀式というかたちで、いまだに認められるのである[23]。

ベンヤミンは、複製芸術ではないオリジナルのもつ崇高性＝アウラを見出し、それが礼拝的価値をもつとする。本作「雛」に照合すると、ベンヤミンの説くアウラとお鶴の父が拝むように飾る雛人形の姿と自然に結びつけられるのである。複製技術時代の芸術作品に当てはまるものとして、本作では玩具箱に放り込まれた鉛の兵隊やゴムの人形が挙げられる。雛と違って、もともとアウラが宿ったかもしれないそれらの玩具は、二次的、三次的に大量生産されているため、すでに芸術作品としてのアウラが宿ることがないのである。

しかしながら、「雛」に三十円の巨額な金銭に相当する価値を見出すのも、ほかでもないアメリカ人である。そこには表象しきれなかった欧米人が日本の美術品の価値を理解し、鑑賞する熱いジャポニスムのまなざしが存在する。芥川龍之介が用意する末尾には、西洋人が東洋文明に対する理解と無理解の矛盾さが潜んでいるのである。

雛が鉛の兵隊、ゴムの人形と一つの玩具箱に放り込まれることは、

[23] ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」（一九三六）（浅井健二郎編訳・久保哲司訳『ベンヤミン・コレクションⅠ　近代の意味』、筑摩書房、一九九五年六月）五八八頁

近代化で成し遂げた目覚ましい資本主義社会の縮図として考えられる。手間暇かかった精巧なものと大量生産の俗悪なものが同じ土台、同じ眼差しで観照・享受・消費されるというパラドックスは、紛れも無く資本主義の発達が生んだ功罪であろう。

5.まとめ

老女であるお鶴の語りは、ごく主観的なものであり、開化人気取りの兄英吉の「癲狂院」送りの話などを披露することで、物語を開化批判の方向へ牽引しようとする意図が明らかである。その偏った語りは、「雛」全体の方向をほぼ決定するが、現実では開化の恩恵を受けている世の中である。明るいランプ＝開化と薄暗い無尽燈＝旧弊といった二項対立の図式でみるのではなく、暮らしをより便利に、潤沢にするという厚生の面では同じ地平に立っているのであり、生活に利便性をもたらす思想は、見事に合致している。ランプと無尽燈のメタファーは、照度の差はあるものの、決して光と闇のような二項対立関係ではなく、コントラストで差が付けられたのである。

従来の読みの多くはお鶴の語りに引きずられて、手放しに兄・英吉を悪人扱いしてきた。しかし兄と母の関係も、対立ではなく対照として捉えられる。凋落した一家の再興を図ろうとして、開化の気運に乗り出そうとする英吉の上昇志向を、お鶴はないがしろにするという語りの屈折が見えた。こうして再検討することで、手段を異にしているが、決してお鶴のいう「意地悪」だけの兄ではないことがわかる。現にテクストの語りから、時代の遅れをとるまいと必死にもがいている明治の人間の姿が多数認められるであり、英吉も同様に努力してきたのである。

玩具箱で見せた古雛の首は、お鶴一家が雛にまつわる思い出を見事に裏切ると同時に、受け側である一部の欧米人が日本伝統文化への無理解、西洋文化一辺倒の文明開化の暴力性をちらつかせている。同時に日本文化の良さは、欧米列強によって発見されたもので、それが世界に紹介されて高い評価を得たのも、欧米をはじめとする強

権の力によって流通ルートを得たからである。明治日本が懸命に仲間入りを果たそうとする資本主義社会がもたらした光と闇は、大量生産・大量消費の摂理への悲観が込められ、やがてグローバル化しつつある現在の世界における伝統文明存滅の危機へと接続するのである。

参考文献

石割透、「「雛」（芥川龍之介）について」、『日本文学』、一九七五年十二月。

鈴木淳、「芥川龍之介『雛』論―創出される〈刹那の感動〉」、『明治大学大学院文学研究論集』、二〇〇三年九月。

宮坂覚、「『雛』―重層的〈語り〉の構造から醸し出される〈語られていないこと〉」、『解釈と鑑賞』、一九九九年十一月。

仁平道明、「「雛」試論―「意地の悪い兄」のためのレクイエム」、『文学・語学』、一九九三年三月。

鈴木敏子、「「枯野抄」・「雛」の読み方」、『日本文学』一九七六年四月。

海老井英次、「現代文教材研究講座２１『雛』－玩具箱の中の〈幻〉芥川龍之介の作品を読む５」、『月刊国語教育』、一九八三年五月。

藤井貴志、「〈廃物〉への眼差し－芥川龍之介「雛」と林京子「雛人形」－」、『芥川龍之介研究』、二〇一二年九月。

ヴァルター・ベンヤミン、「複製技術時代の芸術作品」（一九三六）、浅井健二郎編訳・久保哲司訳『ベンヤミン・コレクションⅠ　近代の意味』、筑摩書房、一九九五年六月。